

現地講師による図工・美術教育の向上と英語イマージョン教育の在り方

——派遣教員としての役割に関する一考察——

前カイロ日本人学校 教諭

北海道札幌市立山の手南小学校 教諭 村井 光

キーワード：現地講師、T・T (Team Teaching)、図工・美術教育、イマージョン教育、英語教育

1. はじめに (問題と目的)

カイロ日本人学校の図工美術教育は、派遣教員の減少等に伴ない数年前から現地の時間講師による英語イマージョン教育が行われている。しかし、現地の時間講師が単独で授業を行って行く中で、3つの問題点があった。それらは、①行う授業が日本の教育と大きく異なること、②教員・講師にも児童生徒にも言語の壁があること、③安全管理が不十分なこと、である。

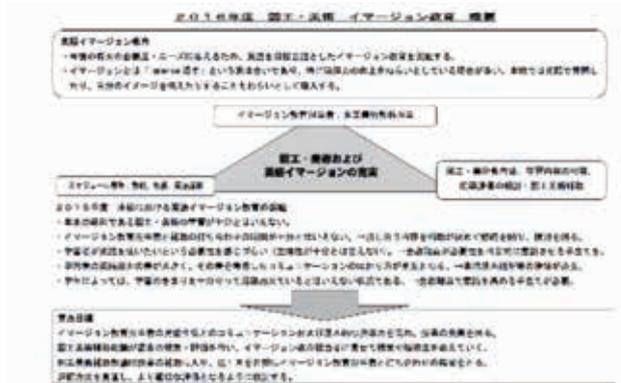
そこで、平成27年度に現地講師の意識・質の向上と自立を目的とした週1～2回の打ち合わせなどを通し、授業計画の仕方、1時間毎の授業の在り方、評価の仕方について相談・指導を行った。これらを通して、よりよい授業や子どもへの関わりの充実化を目指すことが本実践の目的である。

また、現地講師は日本語が使えず、母国語のアラビア語と英語をコミュニケーション言語としている。カイロ日本人学校の英語イマージョン教育という言葉の響きはよいが、その実際は充実した教育活動とは言えない実態があった。そこで、T2として授業に入る時、この英語教育の充実をどのように図っていけるかも、重要な視点として取り入れながら実践を進めた。なぜなら、この英語イマージョン教育を充実させることで、カイロ日本人学校の図工美術教育は1つの形を成し、保護者にも十分な説明がつくと考えられたからである。これは、英語教育をより充実させたい今日の邦人駐在員の願いとも合致する点である。児童生徒が減少傾向にある当校のような現状を打開する、1つの足掛かりにもなると捉えた。

2. 現地講師との打ち合わせ・環境整備

(1) 図工室の環境整備

はじめに、図工室の環境を整備した。準備室は散乱しており、児童生徒が使うはずの道具類も整備されていなかった。そこで、まずは道具類の整理整頓をし、棚には英語表記のラベルを張り、どこに何があるのが分かりやすくした。また、過去の残った教材を整理し、使えそうなものを選別して準備室に保管した。



【図工・美術イマージョン教育 全体概要】

month	Event	Forehand grade (3rd)	Third/forth grade (3rd)	Fifth/sixth grade (3rd)	Junior high (3rd-2nd)
4月		Lesson 1: Introduction to art	Lesson 2: Drawing with lines	Lesson 3: Drawing with colors	Lesson 4: Drawing with shapes
5月		Lesson 5: Drawing with patterns	Lesson 6: Drawing with textures	Lesson 7: Drawing with light and shadow	Lesson 8: Drawing with perspective
6月	サマソン	Lesson 9: Drawing with imagination	Lesson 10: Drawing with observation	Lesson 11: Drawing with expression	Lesson 12: Drawing with emotion
7月		Lesson 13: Drawing with nature	Lesson 14: Drawing with culture	Lesson 15: Drawing with history	Lesson 16: Drawing with art
8月		Lesson 17: Drawing with science	Lesson 18: Drawing with technology	Lesson 19: Drawing with environment	Lesson 20: Drawing with society
9月		Lesson 21: Drawing with art	Lesson 22: Drawing with art	Lesson 23: Drawing with art	Lesson 24: Drawing with art
10月	運動会 Sports Day	Lesson 25: Drawing with art	Lesson 26: Drawing with art	Lesson 27: Drawing with art	Lesson 28: Drawing with art
11月	文化祭 Presentation of Learning at Sports Events	Lesson 29: Drawing with art	Lesson 30: Drawing with art	Lesson 31: Drawing with art	Lesson 32: Drawing with art
12月	新年会 New Year's Party	Lesson 33: Drawing with art	Lesson 34: Drawing with art	Lesson 35: Drawing with art	Lesson 36: Drawing with art
1月		Lesson 37: Drawing with art	Lesson 38: Drawing with art	Lesson 39: Drawing with art	Lesson 40: Drawing with art
2月		Lesson 41: Drawing with art	Lesson 42: Drawing with art	Lesson 43: Drawing with art	Lesson 44: Drawing with art
3月	卒業式 Ceremony of graduation	Lesson 45: Drawing with art	Lesson 46: Drawing with art	Lesson 47: Drawing with art	Lesson 48: Drawing with art

【年間指導計画 英語版】

しかし、今まで現地講師も児童生徒も丁寧に道具を使うことや元にあった場所に後片付けをする習慣がなかったため、すぐに汚れた状態に戻ってしまった。そこで、筆者が授業で指導をすると共に、各担任からも児童生徒に伝え、徹底を図るようお願いした。その後も、定期的に整理整頓が必要になったものの、意識の改善が進み、怪我の防止にもつながった。

(2) 教科書を用いた授業計画

4月当初、図工美術の授業は計画性に乏しく、筆者に非常に伝わりづらいものであった。また、現地講師が思いついたものを中心に行っており、日本で行われている教育とは離れたものとなっていた。

そこで、まずは教科書を一緒に見て、どのような学習場面なのかを共有した。その上で、実現可能な題材を選びながら授業計画を進めていった。このような打ち合わせをくり返す中で、年間指導計画の必要性和導入、展開、まとめの3場構成の授業プランの必要性を感じた。それらを作成し、授業プランは事前に書いて提出し、日本語に訳してもらったものを確認する事を繰り返し行っていった。

(3) 年間指導計画の作成と、英語の翻訳版の作成

年度の途中で年間指導計画を作成した。カイロ日本人学校は、小学部は1・2年、3・4年、5・6年、中学部は1・2・3年生をそれぞれ1つの単位として合同で授業を行っているため、学習指導要領をもとにしながら、隔年で行うもの、毎年行うもの等選別が必要となる。また、何よりもこの計画があることにより、現地講師が日本の題材や教科書に沿って授業を進められるようになる。これらの理由から、次年度はより自立して計画を立てるために、英語の翻訳版を作成しその一助とした。これら年間指導計画には、教科書のページを記載しており、教科書の絵を見てどのような学習かを想起できるようになっている。年間指導計画があることで、「何をしたらよいか」という相談は減り、「どのようにしたらよいか」「材料はどうやって集めるか」「他にこういった学習をさせたいのだが」といった内容面に向けた相談が格段に多くなった。また、日本の学習内容を説得的に説明する時にも大きく役立った。例えば、油粘土を用いた学習の場合、当校使用の教科書では、低学年では積み木、中学年では紐状のもの、高学年では板のような面状のものを素材としてまず作り、そこから立体造形を考えていく構成となっている。各学年によって扱う形が違う事、作れば何でもよいわけではない事を理解してもらう時に、非常に有効であった。

3. 現地の特色を生かした授業づくり

(1) ラクダさん大すき (小学部1・2年) <4時間>

低学年の図工の学習に「動物さん大すき」という、油粘土を用いた学習がある。その学習をラクダに置き換え、

①ラクダに触る・乗るといった実体験をする、②絵を描く、③油粘土でラクダを作る、という学習を構成した。

当日は筆者も他の授業が入っており、全て補助で入ることはできない状態であった。現地講師は、この学習をどのような流れでさせるかについて計画性がなく、本来は①→②→③と学習を進めたかったところ、乗っている間の他の児童の学習を想定できていなかったため急遽②→①→③に変えて進めることになった。また、「絵を描かせる」といった時に何を目的として描かせるか、また、どのような順番で描かせるか(例えば、ラクダのお気に入りの場所を見つけながら、顔のパーツから大きく描くなど)について、指導が全くないことが明らかとなった。油粘土についても、粘土を持っていかせた後何も指導をせずに自由に作らせるだけであったため、筆者の方で体のパーツに粘土を分けて全て使う方法や、1つの粘土からひねり出して体のパーツをつくり出す方法を提示し、作らせることとした。

これらのことから、学習の素材や枠組みはあっても、その内容について細かく学習を構成することがエジプトの教育では一般的ではない事が分かった。そこで、授業後、学習の構成・絵の描き方・油粘土の扱い方等について一通り指導をした。この実践を契機に、時にはおぼつかないながら筆者と現地講師が授業内容について検討し



【体験とセットになり、愛着をもって制作できた】

進めていくこととなった。

(2) 使って楽しい焼き物を・土と炎の造形 (小学部5・6年、中学部) <3時間>

小学高学年から中学では、焼き粘土を素材として用いる学習がある。カイロ日本人学校にはかつて焼き窯があったが、老朽化し取り壊しとなったため、最近ではこの学習はされていなかった。そこで、陶芸家で日本人の妻をもつSamir Labib氏を呼び、焼き粘土を用いた学習を実現した。この陶芸で用いた土は、有名なエジプト南部のアスワンの土であることや、エジプトの陶芸の歴史なども簡単にレクチャーしてもらい、エジプトならではの学習となった。

この実践を通して、日本では油粘土とは違い焼き粘土を用いた学習もしている事を現地講師に理解してもらう一助となった。しかし、現地講師にも制作時に指導して回ってもらいたかったのだが、残念ながら自主的に机間指導をする姿は見られなかった。現地講師には繰り返し指導をしていくこと、その意義や意味をしっかりと理解してもらう事の重要性を改めて感じる実践となった。

4. 師範授業及びT2としての関わり方

(1) 師範授業「コロコロ・ベッタン」(小学部1・2年) <4時間>

現地講師の学習計画を見ていると、個人制作が主で集団制作があまりない事、また集団の組織のさせ方が乏しい事が分かった。そこで、低学年でも集団制作が上手にできる事を師範授業を通して見せることとした。

何より重視したのは、教師の事前の準備である。制作のための紙の張り合わせ、絵の具の本数、ローラーや筆の本数、そしてスタンプ用の材料の用意と、それらをどこにどのように配置するかまで、細かく準備をし、指導をして最後は子どもを動かす事で時数通りに活動出来るところを見せることができた。

また、制作にかかる時間の意識化も重視して見せた。導入、試作、場所の移動、制作、後片付けと、明確に指示を出しながら行っていった。特に見せたかったのは、後片付けのさせ方である。低学年は特に、教師の指示と役割分担の明確化が必要となる。そのような姿勢を見せた後、授業後に簡単に説明もした。打ち合わせの時間が十分でないため細かくは伝えられなかったが、集団制作そのものには興味をもち、次年度も引き続き同様の実践を行ってくれていた。



【児童の共同作品の一部】

(2) 師範授業「墨で表す」(小学部5・6年) <2時間>

墨を用いた学習場面では、素材自体を扱った事がないという事で筆者が師範授業をした。ここでは、授業の内容そのものよりも、教師が見本を作るということを中心として師範授業を行った。なぜなら、現地講師は、子どもの創造性が大事だと言い、初めに非常に大雑把な指示を出すだけで、後はほとんど指導をせずに子どもの好きに活動をさせていたからである。そして子どもが自由に作った後、上手くできていないと注意を促すという悪循環で授業を進めていた。

筆者は、創造性を高めていくという趣旨は間違っていないが、そのために必要な教師の関わりが日本の教育と比べると足りない判断した。

そこで、子どもの創造性が狭まることは覚悟の上で、初歩的な教育技術として見本を見せることを師範授業もしくは打ち合わせで繰り返し伝えていくこととした。

この実践を見た頃、2学期の後半ごろからは、授業の前に必ず見本を作るようになった。特に低学年の授業をする時には丁寧に見本を作ってくることが多くなった。

(3) 師範授業「もう一つの目」(中学部) <3時間>

この実践は、鑑賞を中心に据えた学習である。鑑賞の学習に関して、作品の評価だけでは厳しく、現地講師に



【児童が描いた作品】

評価・評定をしてもらう事が難しいことが明らかとなった。そこで、年度の後半から鑑賞の授業及び評価に関しては担任にってもらう事になった。

鑑賞をする場面では言語化が大きなポイントとなるため、どうしても日本語が必要になる。本実践は、写真の撮り方、撮る場所、モチーフなど、場面の切り取り方によって日常見えているものが違って見えることがある事を提示した後、校内で生徒が撮った写真について別の生徒がキャプションを様々につけるといった構成とした。そして、キャプションをつけたあと、なぜそのようなキャプションにしたのか、撮影者の前で理由を発表し、同じ写真でも感じ方が違う事、撮影者の意図がどう伝わったかを感じる場面を設定した。



【写真の構成・アングルなど工夫をしていた】

この実践は、現地講師に鑑賞教材を提示するだけが鑑賞ではなく、児童生徒同士で作ったものを評価し合う中にも鑑賞の観点が多分に含まれており、そのような活動を取り入れて授業を展開してほしいという筆者の願いのもと展開した。しかし、鑑賞そのものが現地講師の手から離れることとなったため、結果的には1つの授業の在り方として現地講師に見せる事に留まった。なお、上記の様な経緯を踏まえて、鑑賞の授業・評価に関しては、次年度から図工美術補助担当者が全て行うこととして整理された。

(4) T2としての関わり

T2としての関わりは、上記の授業場面に加え実に様々な場面で展開した。その目的は、

- ① T1として必要な動きや指導を見せる。
- ② T1の現地講師に子どもたちの心と体を向かわせる。

ことである。事前の打ち合わせで伝えた事を、実際の場面でのどのように行うのか、まさに実践を通して学んでもらう場面として設定してきたのである。

まず、最も大切にしてきたことが、授業の初めと終わりの挨拶である。当初、初めの挨拶もなく、いきなり授業の導入を話し始める事をくり返しており、小学低学年などは明らかに困惑していた。たとえ英語でも、話を聞き理解しようとする心と体の準備としてまずは挨拶が必要であることを、授業のはじめに現地講師と児童生徒に繰り返し伝えた。

次に、机間指導を含む授業の展開場面での動きである。導入の教師の指示が伝わっているか、創意工夫が見られるかといった児童生徒のポジティブな面を見つけ即時評価していくことを繰り返し見せた。また、時には意図的にT2がいらないような状況を作り、困っている児童生徒に現地講師がどのように動くのかを観察する場面も設けた。1学期当初は現地講師が携帯電話に出て話すという事があったため、準備室や廊下に連れて行きその場で指導する事もあった。これらの繰り返しで、T2が見ている間や、直接現地講師に指導をした時には、積極的に机間指導を行うようになった。

師範授業とT2では、現地講師が見本作りを自主的にするようになったことが一番の効果であったと捉える。カイロ日本人学校において現地講師が見本を提示するという方法は、ノンバーバルでの子どもとの意思疎通、見本(実物)を通した英語でのコミュニケーションの促進、現地講師は図工美術に長けた人間なのだという子どもからの尊敬、という3つの点で非常に有効であった。特に低学年は、現地講師が作ってきた見本に目を輝かせ、同じようなものを作りたい、自分はさらにこういったものを付け加えて作ってみたいという意欲と、現地講師へ向かう姿勢が高まっていた。

また、英語イマージョン教育において、当初子どもは、分からないまま英語で話される事を続けられたため、現地講師の話をしっかり聞くと言う姿勢そのものが身に付いていなかった。しかし、発達段階に応じて、分からなくても努力をすることが大切であることを伝え、それを実践する児童生徒を称賛することで、意識の変化が徐々に表れてきた。それは特に低学年の学習場面で、上記の英語の型を使って話す児童が増えた事、筆者に対し

「先生、こう言いたいんですが、英語でなんて言えばいいんですか」と聞く児童が増えた事、そして自分で言えた時に自信に充ち溢れた表情を浮かべていた事から判断できた。

5. まとめ（成果と課題）

今回の実践を通じた成果を上げると、以下の5点となる。

- ・年間指導計画作成により授業の計画性の向上及び相談の質の向上、時間の短縮
- ・見本を作製し授業に臨む、授業中に携帯を触らないなど、教師の姿勢の改善
- ・年度を通して大きな怪我がなく、児童生徒の道具を使う意識も向上
- ・師範授業やT2としての関わりから、授業に関するお互いの意見の交流
- ・児童生徒の英語に対する意識の肯定的変化

現地講師とは、1学期～2学期序盤までは筆者と意見がぶつかり「私のアイデアの方がよかった」「意味が分からない」と対立する事もあった。しかし、今回の実践を通して、筆者が何を大切にしているのか、日本の教育では学習をどのように計画しているのか、現地講師なりに感じていることが相談の内容や表情、納得の仕方から理解できた。そして、授業の内容について互いの意見をつき合わせるという作業そのものが、授業の質の向上につながっていたことは言うまでもない。

これらを通して、週1～2回のコンスタントな打ち合わせは、有効であったと言える。この打ち合わせは、指導内容と相談内容を指導側の教員がある程度決めておくことが重要であった。また、年間指導計画のような枠組みを共通で用いる事で、打ち合わせの質は格段に向上することが明らかとなった。今回のような体制は、打ち合わせの質の向上も加味してさらに1～2年は必要であると考えられる。

そして、日本語の話せる教員が授業場面に入るということも、様々な点で有効であった。それは、授業中子ども困りを取り除くだけではなく、現地講師に対しても即時指導ができ、教師としての姿勢を現地講師に見せることができるという点で有効な方法であった。このような体制を続ける事で、異文化の現地講師に対して少しずつ意識の変容を求めることができるのだと考える。

また、現地講師の改善だけではなく、児童生徒の意識向上が重要であることが示唆された。T1として関わっていくのは現地講師である。この講師に児童生徒が心と体が向くように、時には厳しいT2として関わる必要もあった。そして、担当教員自らが言語や学習に対しての姿勢を児童生徒に見せ、授業者が異なっても大切な事は変わらないというスタンスを貫く事が非常に重要であることが見えてきた。

しかし、本実践は課題も多く残っている。それは、引き継ぎの不十分性である。今回行われてきたことは、次年度で十分に浸透せず、十分に継続されたといえるのは年間指導計画による授業の計画性の部分であった。エジプトではしばしば、「担当が変わると引き継ぎがうまくされない」ということが話題に上がり、文化性や民族性の違いとも言われる事がある。勿論、エジプトの文化を背景に背負った現地講師の意識に問題があることは間違いない事である。しかし、ここには、担当教員による意識の違いも起因している可能性がある。派遣教員同士で引き継ぎはするものの、大切にしていることや優先される事項が変わると、担当教員の指導内容や相談内容も大きく変わってくる。カイロ日本人学校における今後の図工美術教育は何を大切にしていくのか、ぶれない枠組みの必要性と、それらが機能しているのかを検討し、場合によっては担当教員を指導する機関が大切であると感じた。それが、実際の1つひとつの授業に変化をもたらしていくのだと考える。

今回の実践を通し、派遣教員の大きな使命の1つに、今後長く日本人学校で教師をしていく可能性の高い現地の教員を育てる事があると感じた。我々派遣教員は、通常2年、延長しても3～4年しか日本人学校に直接貢献することはできない。カイロ日本人学校の図工美術教育は、児童生徒へのさらなる教育の充実と共に、特色ある学校作りの一因として大きな可能性があるばかりではなく、派遣教員の果たすべき使命も大きく関わっている領域であるということを筆者自身が学ぶことができた。

参考文献

- ・ウヴェ・フリック『質的研究入門～〈人間の科学〉のための方法論』春秋社、2011年、2月
- ・荒川洋平「日本における英語イマージョン教育の論考」、『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集30』、105-122、2004年、3月
- ・『札幌市小学校 教育課程編成の手引き 1・2学年編』札幌市教育委員会、2015年、2月
- ・『札幌市小学校 教育課程編成の手引き 3・4学年編』札幌市教育委員会、2015年、2月
- ・『札幌市小学校 教育課程編成の手引き 5・6学年編』札幌市教育委員会、2015年、2月
- ・『札幌市中学校 教育課程編成の手引き 美術編』札幌市教育委員会、2016年、2月
- ・『図画工作1・2年～5・6年』日本文教出版、2015年、1月
- ・『美術1～3年』日本文教出版、2016年、1月
- ・『図画工作 1・2年～5・6年 教師用指導書』日本文教出版、2015年、1月
- ・『美術1～3年 教師用指導書』日本文教出版、2016年、1月